

第一章…秘湯の湯けむり、制服脱ぎたて、にゃんこパイロットの誘惑

「ふうむ、これが噂の『癒やしと背徳の秘湯』ってやつかにや？
なかなかエモいちヨイスじゃない、センスいいよ」

俺の隣で、真希波・マリ・イラストリアスは、慣れない砂利道をキユツと音を立てて歩きながら、そう宣った。

老舗の温泉旅館に似つかわしくないミッションスクール風の濃紺の制服——と、その制服の布地のテンションを限界まで高めている、あまりにも豊満なマリの胸に、周囲の宿泊客の視線が突き刺さる。

だが、当の本人はそんな視線など意にも介さず、茶色の二つ結びを揺らし、赤縁の眼鏡の奥で楽しげに瞳を細めていた。

「いや、背徳ってのは余計だろ。ただの温泉旅行だ」

俺がそう言うのと、マリは足を止め、くるりところらを向いた。少し上を向いたまま、彼女はいたずらっぽく笑う。

「ふふ、そんなこと言って、内心はドキドキしてるくせに。」

だって、この格好で温泉に来ちゃったんだよ？ しかも、二人っきりのお部屋付き露天風呂なんて、完全に私たちへのご褒美って感じがする」

「ご褒美って、何の？」

「んー？」マリは首を傾げ、片側の二つ結びを指でくるくると弄ぶ。「そりゃあ、この間、私と姫で使徒ちゃんをフルボッコにしたご褒美だよ。」

命がけの戦闘なんて、最高のゲームじゃない！ スリルと高揚感で心臓バクバクだもん。これくらい贅沢してもバチは当たらないにゃ」

彼女の言う通り、彼女にとっての戦闘は、まるでゲームのクリア報酬を得るための高難度チャレンジのようなものだ。

仲居さんに案内され、辿り着いたのは、離れにある特別室だった。

「わあ、風流だねえ。お庭も立派！」

仲居さんが襖を閉め、部屋には俺とマリ、そして静かな山の空気だけが残った。

「さてと、温泉の前に、この窮屈な制服を脱ぎ捨てて、さっぱりしちやおうかにや」

マリはそう言って、制服のブレザーのボタンに手をかけた。その仕草一つで、部屋の空気が一変する。

「ちよつと、ここで脱ぐのかよ」

俺が慌てて制止すると、マリは「ん？」と小首をかしげた。

「なに？ いけないの？ 別にやましいことなんて考えてないよ。制服は動きにくいから、早く脱いで楽になりたいだけ。もしかして、期待してた？」

マリは意地悪く笑い、眼鏡のブリッジを人差し指でクイツと持ち上げた。

「期待なんてしてねえよ、ただ……」

「ただ、なんだい？ ほら、早くお着替えしないと、せつかくの湯けむりタイムが勿体ないよ」

マリはブレザーを脱ぎ、椅子に放り投げた。彼女が中に着ていたのは、薄手の白いブラウスだ。そのブラウスの素材が、彼女の胸の膨らみを強調しすぎている。

「は、速いな。せめて衝立の後ろでやれよ」

「なにを言ってるの。いい景色を独り占めしようだなんて、ずるいよ。ほら、ちゃんと見て

て。私のご自慢なんだから」

そう言って振り返ったマリの胸元は、すでにブラジャーのレースの境界線を超えて、豊かな膨らみを主張していた。

マリは、目の前の浴衣を手に取り、慣れた手つきで広げた。

「浴衣、着るのも久しぶりだよ。なんか新鮮！でも、これって、どう頑張っても胸が邪魔しちゃうんだよねえ」

彼女は浴衣に袖を通すが、案の定、豊かな胸のせいで前が綺麗に合わない。胸元が大きく開き、薄紅色の肌と深いくびれが見え隠れする。

「よし、これで完成！どうかな？似合ってる？」

マリは帯を結びながら、俺に尋ねる。

「ああ、まあ、似合ってるよ。すごく、その……旅館に来たって感じがする」

「ふふ、ごまかせないで。胸のところに目がいってるの、見え見えだよ。正直でよろしい！」
マリは、着付けが終わるや否や、俺の目の前まで歩み寄り、浴衣の裾を掴んで、わざとらしいお辞儀をした。

「さあ、早くお着替えして。温泉が呼んでるよ。もちろん、温泉に入った後のお楽しみもね」
その言葉と同時に、彼女の胸の谷間が、俺の視線にさらされる。

マリは立ち上がり、そのまま俺の頬に顔を近づけた。赤縁眼鏡が触れそうなくらいの距離で、彼女は囁く。

「まずは湯けむりの前菜を、じっくり味わおう。その後は、とろけるようなメインディッ

シユが待つてゐるんだから。楽しんで心臓がキュンキュンしちゃうにや」

マリは最後にそう言つて、俺から離れた。

俺は、浴衣に着替えるために、床に置かれた浴衣を手取る。だが、胸の奥では、彼女の言葉が繰り返して響いていた。

—————

第二章…湯けむりの迷宮、豊満なご自慢

「さあ、行こう」

マリはそう言つて、浴衣姿で部屋の襖を開けた。廊下に出ると、マリは曲がりくねった古い木造の廊下を、まるでスキップでもするかのように軽やかに進んでいく。

「どこつて、お風呂に決まつてゐるじゃない。この旅館の目玉、山の景色を一望できる露天風

呂だよ！」

マリは壁にかけられた案内図を指差す。そこには『男女大露天風呂（混浴）』の文字。

「おい、まさか、そつちに行くつもりか？」

「ふふふ、ケチなこと言わないの。せつかくこんな雰囲気の良い場所に来たんだから、ダイナミックに楽しまなきゃ勿体ない。それに、部屋の露天風呂は、もっと後のお楽しみにとっておこう」

マリは振り返り、悪戯っぽい笑顔を浮かべた。

「ほら、私のご褒美なんだから、付き合ってくれるよね？」

「じゃあ、ここだね。先に言っておくけど、あんまりドキドキして、心臓止めちゃだめだよ？」

マリはそう言って、女性側の脱衣所へ消えていった。

数分後、先に入浴を済ませたらしいマリが、露天風呂へと続く石段の下で待っていた。

「おっそい、おっそーい！ 早くおいでよ、湯加減を私に教えて」

湯けむりが立ち込める中、マリは腰にタオル一枚を巻いただけで、両腕を組み、仁王立ちになっていた。そのタオルでは、全く隠しきれていない。水に濡れることで肌に張り付き、かえって際立ってしまうほどの、マリの豊かな胸が、目の前に広がっていた。

俺はゆっくりと湯船に足を浸し、マリの隣へと進む。

「ふう……最高にや。この開放感がたまらない。戦闘で張り詰めた身体が、とろけていくみたい」

マリはそう言いながら、満足そうに目を閉じ、大きく息を吐き出した。その吐息は、甘く熱を帯びて、俺の耳元まで届く。

「ねえ、どう？ この眺め」

マリは突然目を開け、俺の視線が集中している場所——胸元をボンと叩いた。水面から顔を出している豊満な双丘は、湯のせいで薄く赤く染まり、その存在感を誇示している。

「なかなか良い景色だろ？」

「あ、ああ……絶景、だな」

俺が動揺を隠せないまま答えると、マリはクスクスと笑った。

「ふふ、正直なのは、美德だね。みんなこうして、私を見てるんだ。仕方ないよ、だって、私、乳の大きいいい女なんだから。そう思わない？」

マリは挑発的に体を少し乗り出し、胸を張った。湯船にわずかな波紋が立つ。

「こんなに立派なもの、パイロットスーツの中だけじゃ勿体ないもんね。戦闘中は、これが邪魔で邪魔で仕方ないけど、こうして開放的な場所にいると、むしろ誇らしいんだ。ねえ、私のご自慢を、もっと近くで見えてみる？」

マリは片手を上げ、赤縁眼鏡を外し、俺の手の中にそっと置いた。眼鏡のないマリの瞳は、大きく、純粹な好奇心に満ちている。

「湯けむりでよく見えないからさ、ほら、もう少し近づいてよ」

マリは、俺の頬に湯のついた指をそっと当て、自分の方へと顔を向けさせた。

「ね、私、本当にいい女でしょ？ 命がけて戦うんだから、これくらいのお褒めは、許されるよね」

彼女の吐息が、湯の熱とともに俺の頬にかかる。

「いい女、だよ……」

「ふふ、正直」

マリはそう言っつて、湯船の中で俺の太ももに自分の足を絡ませた。

「ここから先は、もう戦闘じゃない。ゲームも、クリアしちゃった。残るは、最高のご褒美を味わい尽くすだけ。ねえ、この湯けむりの迷宮で、私たちだけの秘密を作っちゃおうよ」

「湯あたりしちゃったみたい。なんだか、クラクラする……抱きしめて、ちよつと支えてくれないかじゃ？」

その囁きは、甘い吐息となって湯けむりに溶けていった。

俺は手を伸ばし、湯に濡れた彼女の豊かな胸を、そっと抱き寄せた。

—————

第三章…とろけるメインディッシュ、湯煙の下の吐息

俺が手を伸ばし、湯に濡れたマリの豊かな胸を抱き寄せた瞬間、彼女は「んっ……」と甘い、微かな声を漏らした。

「支えるって約束、ちゃんと守ってよ？」

マリはそう言って、湯の中で俺の首に腕を回した。彼女の肌は、温泉の熱を吸って、驚くほど滑らかで熱い。

「言葉じゃなくて、体で支えてよ。ほら、もっどぎゅーって」

「さつきから、ずっと考えてたでしょ。正直者は、ご褒美をすぐに受け取るべきだよ」

俺は躊躇を捨て、彼女の顔を両手で包み、深く、熱く、その唇を奪い返した。

「んっ！ふう……はあ……んん……ん、すう……熱いね……！こんなにアツアツなキス、久しぶり……にゃ」

マリの甘い声が、キスの合間に途切れ途切れに響く。

マリはさらに体を密着させ、その胸を俺の胸板にグリグリと押し付けた。

「ねえ、いいでしょう？湯けむりの中で、二人っきり。私のご自慢は、どう？ちゃんと熱を伝えている？」

マリはキスを中断すると、濡れた唇で俺の耳元に囁いた。

「なに、緊張してるの？赤い顔しちゃって。ほら、ちゃんと見てて。私のご自慢なんだか

ら
」

マリはそう言って、自分で俺の手を掴み、その手を彼女の胸に押し付けた。

「どう？この張り！いつだって命がけて戦ってるんだ。この、体、まるごとが、私だけの成果なんだから」

「んんっ、くうっ…！」

俺の指が彼女の胸に触れるたびに、マリの喉から、抑えきれないような呻き声が漏れる。

「ふふ、そんな声出しちゃって。恥ずかしいね、私たち」

マリは立ち上がり、自慢の胸を俺の手のひらに捧げるように差し出した。

「はあ……すごいね。こんなの、戦間の時じゃ絶対味わえない、最高の高揚感。パイロット

スーツを破りたくなくなるくらい、きもちいいにゃ」

「もつと、もつと撫でて。私が、もつといい女だつてことを、教えてあげて」

「んっ、ああ」「んう」と鳴き、その度に湯面が小さく揺れた。

「ねえ、もつと、もつと。ここじゃ、湯が邪魔してあんまり堪能できないよ。早く、私たちの部屋に戻って、メインデッシュの続きを始めよう？」

マリは俺の耳たぶを甘噛みし、そして囁いた。

「待てない……早く行こう」

俺は、彼女の熱に完全に呑み込まれ、マリを抱きかかえて湯船から立ち上がった。

第四章…甘美なる授乳、暴走するジヨイスティック

部屋に戻るなり、私たちは吸い寄せられるように、敷かれたばかりの真つ白な布団の上へと倒れ込んだ。

畳の井草の香りと、マリの体から立ち上る湯上がりの火照った甘い匂いが、鼻腔をくすぐる。

「んっ……はあ、やつぱり畳はいいねえ。落ち着く……なんて、言うと思った？」

マリは私の胸板の上に馬乗りになり、濡れた髪を乱暴にかき上げながら、挑発的に笑った。

「落ち着くわけないじゃん。今の私、戦闘モード全開なんだから。ほら、さっきの続き……
ここでなら、誰にも邪魔されないよ？」

彼女はそう嘯くと、自ら浴衣の襟を左右に大きく引き広げた。
そこには、あの圧倒的な質量を誇る双丘が、遮るものなく鎮座していた。

「ほら、ぼーっとしてないで。ガツガツこないで、獲物は逃げちゃうよ？ お腹を空かせたわんこみたいに、無心で食らいついておいて」

マリは私の頭を両手で掴むと、強引に自身の豊かな胸へと引き寄せた。

私はその誘惑に抗えず、目の前のたわわな果実へと口づけを落とし、その先端にある愛らしい突起を口内に含んだ。

「ひゃっ……！ん、んんっ……！いきなり、そこ……っ！」

強く吸い上げると、マリの喉から高い声が跳ねた。

「はあ……ん、くう……！いいね、その必死な吸い付き……ゾクゾクする……にゃ」

マリの背中が反り、豊かな胸がさらに私の方へと押し出される。

「んあ……ああつ、すごい……吸われてる……私の、ご自慢……そんなに美味しい？」

マリは息を荒らげながら、恍惚とした表情で私を見下ろしている。

「ふふ……よしよし。いい子だねえ。もつと、もつと強く吸っていいよ。私の全てを飲み干すくらいに……」

私が吸う力を強め、舌先で頂を弾くと、マリはビクンと体を震わせ、快楽のあまり顎を上げた。

「はあ、はあ……上ばっかりズルいな……。お返し、しなきゃね」

マリの甘い吐息が降り注ぐ中、不意に、彼女の細い指先が私の腹部を這い降りてきた。

浴衣の合わせ目から侵入してきたその手は、迷うことなく私の熱く膨れ上がった中心へと

到達する。

「っ!？」

「ふふ、やっぱり。こつちも、戦闘準備完了ってわけだ」

私が彼女の胸に吸い付いている間、マリの手のひらが、私の熱源を服の上から優しく、しかし確実に驚掴みにした。

「んんっ……!! どう? 私の胸の味に夢中になってる間に、こつちは随分と素直になるじゃない」

「う、あ……マリ……っ」

「喋らなくていいよ。今は口を離さないで。もっと強く、吸って……! 私をイカせるつもりで、吸い尽くして!」

マリは私の股間を弄る手の動きを早めた。

上からは極上の柔らかさと、下からは巧みな指使いによる強烈な快感。

「あつ、ああつ！ そう、そこっ！ 強い、吸う力が……っ！ 乳首、取れちゃう……っ！」

マリは私の顔を胸に埋めさせたままで、自身も快感を貪るように腰を揺らし始めた。

「はあ……っ、んくう……っ！ 同時入力、効くねえ……っ！ 脳みそ、溶けちゃいそう……っ！」

「……んっ、ああ……もう、我慢できない……。私の全部、めちゃくちやにして……」

彼女の手が、私の浴衣を乱暴に引き剥がしにかかる。

第五章…魂の融合、終わらない夜のシンクロ

私の浴衣が乱暴に剥ぎ取られ、露わになった熱源が、マリの熱い視線に晒される。

「待ちきれない……もう、限界突破しちやいそう」

マリは私の腰の上に跨ったまま、自身の秘部を私の屹立した先端へとあてがった。

「ねえ、私のコックピット……操縦席に、深く、一番奥まで入ってきて。私の暴走、止めてみせてよ」

彼女が腰をゆっくりと沈めると、熱く湿った肉壁が私の先端を呑み込み始めた。

「くっ……ああ……！」

「んんっ……！！はあ……っ、すごい……入ってくる……！！」

根元まで深々と結合した瞬間、マリはのけぞり、絶叫に近い喘ぎ声を上げた。

「ああーっ！……んっ、はあ、はあ……！ 繋がった……！ シンクロ率、一気に無限大……っ！」

私は彼女の腰を両手でしっかりと掴み、下から突き上げるように腰を動かし始めた。

「っ、んあ！ ああっ！ そこっ、いきなり、深いっ！」

「マリ、動くぞ……」

「いいよ……っ、遠慮しないで！ もっと激しく、私を揺さぶって！ 壊れるくらいに！」

私の動きに合わせて、湿った水音が部屋中に響き渡る。

突き上げるたびに、マリの自慢の双丘が大きく波打ち、視覚的な暴力となって私の理性を

削り取っていく。

「ああっ！んくっ、はげし……っ！すごい、すごいよ……！戦ってる時より、ずっとドキドキする……！」

マリは私の首に腕を回し、汗ばんだ肌を押し付けてきた。

「んっ……ちゅ……んむ……」

唇が重なり、唾液を交換するような深いキスを繰り返す。

「はあ……んっ、もつと……もつと奥を突いて……！私の芯、貫いて……！」

「マリ……最高だ……っ」

「私も……っ、今までで一番、気持ちいい……にや……！脳みそ溶けて、真っ白になっちゃ

う……………!!」

彼女の中の圧力が強まる。私ももう、限界だった。

「マリ、もう……………いく……………っ」

「いいよ……………っ、来て……………!! 私の中で、全部出し切って……………!! 命、私に注ぎ込んで……………!!」

マリが脚を私の腰に強く絡め、逃がさないようにしがみついた。

私は最後の力を込め、彼女の最深部へと腰を打ち付けた。

「ああっ! くるっ、きちやう……………っ!」

「っ! くら……………!!」

ドクン、と私の中心から熱い奔流が放たれた。

マリの膣内へと、愛液と共に白濁した熱が勢いよく注ぎ込まれていく。

「んああああーっ！熱いっ、中っ、熱いのがいっぱい……っ！！」

マリは弓なりに体を反らし、私の背中に爪を立てて絶頂を迎えた。

二人の快感が一つに溶け合い、意識が真っ白な光の中へと昇華していった。

「はあ……はあ……ん……」

私はマリの上に覆いかぶさったまま、彼女の首筋に顔を埋める。

「……んふふ。すごい、量……。お腹の中、まだ熱いよ」

マリは甘く蕩けた声で囁き、私の唇に何度も軽いキスを降らせた。

「ちゅ……ん……。気持ちよかった？」

「ああ、最高だった。マリは？」

「聞くまでもないでしょ？……見て、この顔」

マリは、汗で張り付いた髪を払い、とろりとした笑顔を見せた。

「完全に、墮とされちゃったにや。……意外と強引なんだから」

彼女は私の胸に頬を擦り寄せ、愛おしそうに呟く。

「でも、そんなところも好きだよ。……今日は、もう離さないからね」

「俺もだ。朝まで、ずっとこうしていよう」

「うん……。最高の『ご褒美』を、ありがとう」

エピソード…朝陽のアンコール、終わらない熱

障子の隙間から差し込む鋭い朝陽が、瞼を刺した。

重たいまぶたをこすりながら意識を浮上させると、視界いっぱいには、光り輝く白磁の肌が飛び込んできた。

「……んう、おはよ。やっと起きた？」

マリはすでに目覚めていたようで、枕に頬杖をつき、とろりとした瞳で私を覗き込んでいた。

掛け布団は腰のあたりまで無造作に蹴飛ばされており、マリの豊かな双丘が朝の光に晒されている。

「ふふ、すごい寝顔だったよ。昨晚、あんなに暴れたもんねえ。エネルギー、空っぽになっ

ちゃった？」

マリは悪戯っぽく微笑むと、人差し指で私の頬をつついた。その指先が、首筋へと、ゆっくりと遠い降りてくる。

「……まだ眠いのかい？ でも、体は正直みたいだよ」

彼女の指が布団の中に滑り込み、朝の生理現象で主張を始めていた私の中心に触れた。

「っ！ マリ……朝から……」

「朝だから、でしょ？ 私のエンジンの暖機運転は、もうとっくに完了してるんだから。……ほら」

マリは私の手を取り、自身の胸へと導いた。

手のひらに伝わるのは、圧倒的な柔らかさと熱量。先端の突起はすでに硬く尖り、私の指

を誘うように微かに震えている。

「んっ……あ……。触るだけで、こんなに……体が反応しちゃう。せいで、私のセンサー、壊れちゃったみたい」

マリは熱っぽい吐息を漏らし、私の唇に軽いキスを落とした。

「ねえ、このまま……朝の運動、しちゃうか？ 昨日の続き、まだ足りないんでしょ？」

「……手加減なしだぞ」

「望むところ！ どっちが先に音を上げるか、延長戦のスタートだにや」

マリは猫のようにしなやかに身を翻すと、再び私の上に跨った。

「さあ、コックピットに搭乗して。……また、私を狂わせてみて」

甘い地獄のような、最高の一日がまた始まるうとしていた。

く完く